さいたま新都心に一番近い学校

下落合小だより

令和８年２月号
令和８年１月３０日
さいたま市立下落合小学校
電　話　８５２－２２８０
ＦＡＸ　８５２－０１８８
E-Mail
shimoochiai-e@saitama-city.ed.jp

学校目標　よく考える子　思いやりのある子　明るく元気な子

主体的・対話的で深い学び

校長　小田切　倫子

寒波の訪れで、寒い日が続いています。春の訪れが待ち遠しいですね。インフルエンザ等の感染症も流行っていますので、くれぐれも健康に御留意ください。

さて、皆様は表題の**「主体的・対話的で深い学び」**という言葉を聞いたことがありますか？私たち学校の教員は、それこそ耳に胼胝ができるほど繰り返し繰り返し聞いている言葉です。なぜなら、この言葉は令和２年度から全面実施となった現行の学習指導要領改訂のポイントの一つで、これまでの授業を改善するための視点として示されたものだからです。

先日、本校３年生のある学級で校内研修の研究授業が行われたのですが、その授業はまさしく**「主体的・対話的で深い学び」**でした。教科は理科で、「物の重さ」という単元。単元の前半では、物は形が変わっても重さは変わらないということを、粘土を丸くしたり細長くしたり小分けにしたりして重さを量る実験を通して理解します。生活場面に当てはめてみると、立ったり座ったり姿勢を変えて体重計に乗っても体重は変わらないということですね。研究授業は単元後半の部分で、塩と砂糖を使って、体積が同じでも物によって重さが違うということを理解する内容でした。塩と砂糖はよく似ているため、重さ比べをするとどちらが重いのかを大いに悩ませることができるので、子どもたちは課題にぐっと引き込まれていきます。まずは、塩や砂糖は粒を集めて“同じ体積にして重さを量る”という必要感をもたせるところから始まります。そのために、実際に塩と砂糖を小さなジッパー袋やカップに入れて渡しました。子どもたちは早速ジッパー袋を指で押してつぶしてみたり、カップを振って粒の動きを観察したり、指先でつまんで直接触ってみたり、思い思いに活動を始めました。全員の表情から、課題を自分事として捉えて**主体的**に取り組んでいることが伝わってきます。この活動から、塩と砂糖では触り心地や動き方が違うことや、当然一粒で重さを量ることができないことなどを体感した上で、重さを比べるためには体積を同じにしなければならないことを導きます。そして、理科として重要な結果の予想。『塩の方が重い』『砂糖の方が重い』『同じ』の三択なのですが、子どもたちの予想は…、なんと『砂糖の方が重い』が圧倒的に多かったのです。ここからが今回の研究授業の目玉である対話タイム。まずは同じ予想を立てた人同士が集まり、対話を通して自分の考えをより明確なものとしました。次に、違う予想を立てた人同士が集まっての対話です。「塩を動かしたらサササーって速く動いてサラサラしてたから、下の方にたまりやすくて重いんじゃない」「砂糖は雪みたいにふわふわしていて、雪玉をギュってすると固くなって重くなるから、砂糖の方が重いと思う」「でも、わたあめは砂糖でできていてすごく軽いから、砂糖の方が軽いよ」など白熱した様子。子どもたちの話していることは、本質から外れたちぐはぐな部分もあるのですが、言いたいことのイメージはよく分かります。この実験、塩と砂糖の“体積を同じにする”と言いましても、入れ方によって体積は変わりますので、実は厳密ではない部分もあり、そういう意味で子どもたちを惑わせてしまうところもあると思うのですが、子どもたちは実物に触れた活動も生かしながら、理科としての「見方・考え方」を働かせ、本当によく思考していました。友達の話を聞き、自分の考えが変わった子どももおり、子ども同士の協働を通して自己の考えを広げ深める、**対話的**な学びの姿です。最近では端末を使っての学習も進み、動画を見たり、自分の考えをＰＣに打ち込んでクラウドで共有したりする授業もよく行われるようになりましたが、今回は、実物に触れ、身振り手振りも入れながらテンポよく直接議論を交わす授業スタイルが、子どもたちの深い学びへつながっていたと感じました。

本校で研究授業をする際は、対象学級の全児童を教員が分担して授業参観をし、その一時間、最初から最後まで全児童が主体的に取り組んでいたかに視点を当てた協議を行い、研究を深めています。今後も、不易と流行を見極めつつ、今求められている児童一人ひとりの**「主体的・対話的で深い学び」**の実現に向けて、授業力向上に努めてまいります。